書院庭園に関する一考察

浅 野 二 郎*
仲 隆 裕*
藤 井 英 二 郎*

A consideration on the shoin garden

Jiro ASANO
Takahiro NAKA
Eijiro FUJII

摘要：わが国の住宅建築の重要な様式の一つとして「書院造り」がある。この書院造りの住宅に対応する庭園として書院庭園がある。本論文は法然上人絵伝、芦引絵などの絵巻物類あるいは町田家旧蔵本・上杉家蔵本洛中洛外屏風などの諸史料を主な検討素材とし、また寺院における庭空間の取り扱いなどをも併せ考えつつ、書院庭園の成立にかかわるさまざまな要素を検討・考察したものである。

はじめに

本論文では書院庭園にかかわる多くの問題のうち、主として書院庭園の成立に関するいくつかの問題を採りあげ、考察する。書院庭園の成立について考える場合、その考察の重要な部分に住宅建築の様式的展開の問題がある。古代において成立した寝殿造りが中世に向けて次第にその内容を変え、書院造りへと展開した。庭園の実態もまた住宅建築のこのような様式的展開に対応して、寝殿造り庭園から書院庭園へと展開した。

この庭園における様式的展開をつぶさにあとづけるための資料は、しかし、まことに残念ながら余り多く残っていない。本論文では、生活にかかわる行動の時代的变化、それに伴う住宅建築の変容とそれに対応してみられる庭園の展開——それは書院庭園成立の考察において根幹をなす問題とみてよいであろう——に関する考察はしばらく措き、書院庭園の成立を支えたと見做される2、3の点を指摘し、いささか考察を加えようとするものである。この考察に当っては、鎌倉・室町時代に描かれた絵巻物および町田家旧蔵本・上杉家蔵本などの洛中洛外屏風をその中心資料とする。

1. 付書院

書院庭園の成立にかかわる要因を考える場合、まず付書院を取りあげねばならない。

付書院は中世の絵巻に数多く見ることができ、鎌倉時代にはすでにあったとされる。¹⁾しかし、この時期における付書院は法然上人絵伝巻17の初頭にみえる付書院(図1)のように、一般の室空間からややせり出し、書見の

ための閑静な空間をつくったもので、まことに実用に即した設備であったと解される。図1は一代の高僧 聖覚が住む安居院の僧房の姿を描いたもので、小屋根をつけた付書院(出文机)では聖覚が執筆している。この出文机の3方は白壁で囲まれ、前面の壁面だけには2本の小障子が立てられていて、採光と共に書見に疲れた目をふと窓外に遊ばせるための装置となっていた。このようにみると、付書院(出文机)の外に展開する庭空間は、書見の場から窓外のたたずまいを見やめるためのものであり、そしてそれは、専ら心を和らげるための構成であることが望ましいものであったろう。この図ではまことにさりげなく、しかしどこか人にぬくもりを感じさせる松垣を高からず、また低からずに建てめぐらし、そこにささやかな平庭をつくり出している。この小庭には、ひともとの白樺の古木と数個の景石が配されているだけで、殊さらに人目を惹くものではなく、まことに閑寂な空間を見事なまでに作り出している。

図-1 安居院の付書院とその前庭
(続日本絵巻大成巻1、法然上人絵伝(上)より)

図-2 法然閑居の自房にみる付書院とその前庭
(続日本絵巻大成巻2, 法然上人絵伝(中)より)

この安居院の付書院前庭に類するものとして、ここでは同絵伝巻21後段の図を取りあげる(図-2)。図は法然閑居の自房の姿を描くもので、筆を走らせる法然の姿が見える。付書院前庭には、苔に覆われた、地瘤とも見えるごく低い築山がみえ、その麓には軒端に添うようにして、ふたもとの椿らしい古木が配植されている。古木の根元には小ぶりの景石が配されていて、まことに簡素な平庭がつくり出されている。庭を限る桧垣の一部が画面左手前に見えて、付書院前庭の静かな雰囲気のみながりが画面からもよく看取される。

図-3 法然の住房にみる付書院；脱石・縁の状況
(続日本絵巻大成巻2, 法然上人絵伝(中)より)

絵伝巻24, 巻頭の絵(図-3)は法然が経典を講ずる場面である。ここでは付書院のある部屋に通ずる板唐戸の前に沓脱が据わり、矩の手にまわったところにみえる付書院の小障子は閉ざされている。付書院前庭はごく狭く、この付書院前の庭と弟子たちと対話する部屋の前庭とを隔てるようにして、ひともとの庭樹が植えられている。これに類する例として、同絵伝巻4の末尾に描かれる叡山西塔の黒谷にある僧堂の例を取りあげる(図-4)。図には山麓の斜面をわずかに削平しながら建てた僧堂の姿が描かれている。そこでは崖にさしかけるようにして付書院が設けられており、崖ぎわにはかえでの古木が立ち、紅葉の美しい姿が描かれている。『すまい』の空間を、いま仮りに『晴』と『蓼』とに分けて考えると、ここでは、前の例(図-1)にみた付書院の前庭と、接客空間としての客間の前庭を隔てるようにして設けられていた

図-4 黒谷慈眼房の庭園
(続日本絵巻大成巻1, 法然上人絵伝(上)より)

あの桧垣、即ち『晴』と『蓼』を隔てるための施設はなく、双方の前庭(まえにわ)はひとつながりの庭空間となっている姿がみられる。尾根裾に添えて極く簡素な柴垣がみえるが、それは僧堂としての境界を示しているにすぎない。おそらく、人里を遠く隔てた山居では、図-1にみられるような『晴』と『蓼』をわけ隔てることすら必要としないのであろう。

付書院が蓼に属するものか否かについては説の分れるところであろう。ただ、上述のように付書院が出文机と呼ばれ、実用の施設であった時期に限れば、それは表向きというよりは、より内向きのための施設であったとみてよいであろう。それは芦引絵における菅原某の屋敷の状況(図-5)から、よく読み取ることができる。

図-5 菅原某の屋敷の裏座敷にみえる付書院
(続日本絵巻大成巻20 芦引絵より)

やがて、それまで蓼の空間に設けられていた付書院が、晴の空間のためのものとして施設されるようになる。

このような付書院の位置づけの移り変りの過程における極く初期の段階にあたるものとして、法然上人絵伝巻18の第13紙(図-6)にみる姿が挙げられるのではあるまいか。即ち、ここでは付書院の小屋根には見事な唐破風が取り付けられ、机上には経巻とともに仏像が安置されている姿が認められる。付書院を仏像安置の場とみ、これを室の荘厳——装飾——と解すれば、この姿はある意味

図-6 仏像を祀る付書院とその前庭
(続日本絵巻大成巻1, 法然上人絵伝(上)より)

で“晴”の要素をもつものといつてよからう。

また、同絵伝巻3のI6~18紙にみる叡山西塔の功德院の状況を描いた図では、既に後世、書院上段の間として構成される、そのような状況を想わせる付書院が描かれている(図-7)。これら図-6、図-7では、付書院前の庭園が、たとえそれは自然を巧みにとらえた自然の“にわ”であったにせよ、確かに一つの庭園とみてよいのではあるまいか。このようにしてみると、付書院は裏の空間から、次第に晴の空間へと展開し、それに対応して、その前庭もまた、裏の庭としての構成から、次第に晴の空間へと展開したと見たい。ただ、このような展開が、時間の推移と正しく対応して整然と行われたとするものではなく、むしろこの流れは一進一退するなかで、いわばさまざまな態様をとりながら展開していったと解すべきであろう。

図-7 叡山西塔功德院の付書院とその前庭
(続日本絵巻大成巻1, 法然上人絵伝(上)より)

2. 立部(堅部)

主として平安・鎌倉時代、貴族の邸宅の空間分割の装置に立部がある。図-8は藤原俊盛邸における立部の用例であり、立部によって表向きの空間の一部を内向きの空

造園雑誌 50(5), 1987

図-8 立部による空間分割の一例(藤原俊盛邸)
(続日本絵巻大成巻14, 春日権現験記絵(上)より)

間として分割している状況がみられる。いま、この立部のルーツについて考えるとき、その重要なものの一つに幔幕があげられよう。図-9は紫宸殿南庭で行われる宮廷儀式のひとつ賭弓の模様である。いま、南庭に設えられた弓場で儀式が進行中であり、弓場を限る幔の手前は射手たちのための饗饌の場である。即ち、ひとつの庭空間が臨時的に2様に用いられるとき、2つの空間を隔てる装置としてここでは幔が用いられている。ひとつの庭空間の分割が、このように極く臨時的に要請されるだけでなく、ある程度それが継起的に要請されるとき、幔に代るものとして立部あるいはこれに類する装置が発案されたとみてよいのではなからうか。

図-9 幔による空間分割の一例(紫宸殿南庭)
(日本絵巻大成巻8, 年中行事絵巻より)

図-10は貴族の邸、寝殿の一角、壺庭での蹴鞠の情景である。桜、松、柳、楓の“懸りの木”が植えられている。左手、松皮葺の広庇には咲き誇る桜花を立部越しに楽しむ女官の姿が描かれている。この庭上に設けられた立

図-10 立部による空間分割の一例(宮廷貴族邸)
(日本絵巻大成巻8, 年中行事絵巻より)

は広底からこの桜の根元までの範囲を限っていて、蹴鞠場となっている庭空間と左手の殿舎前の庭空間とを完全に仕切るものとはなっていない。つまり、双方の庭空間は、この立部によって隔てられながら、一面では連続するかたちを残していることが解る。

以上に見るような立部は時代の経過に伴って次第にその用例が少くなる。それは、立部が垣や塀として次第に変容する結果に基づくとも見るべきかも知れない。また、それは一面において庭園そのものの変質に由来するものとみるべきかも知れない。そしてそれは、寝殿造りにおいて間仕切りが、たとえば几帳や立部などによってなされたように空間を分割する度合いが低いのに対して、書院造りでは壁によって明確に仕切られるようになってくる経過と深くかかわる問題とみてよいのではあるまいか。つまり、立部の用例の減少は、庭園を含めて空間に対する意味づけが、時代の変遷に伴って変化することに由来するとみてよいものと考ええる。

3. 洛中洛外屏風に見る庭園

書院造りの成立期とされる室町時代における住宅庭園、特に書院庭園を検討するうえで、現存する庭園の事例は、遺跡を含めても極めて乏しい。この欠を補う資料として洛中洛外屏風が取りあげられる。同屏風は数種現存しているが、本論文では町田家旧蔵本および上杉家蔵本を取りあげる。

ここでまず問題となるのは、これら2つの屏風が何時の京都の姿を描いているのかである。堀口によれば、町田家旧蔵本には義晴の室町殿造営以前の、また上杉家蔵本には天文17年から永禄7年まで²⁾における京都の有様が描かれている。なおこれには異説もあるが、ここでは主に堀口の見解に従っておく。次に、絵の写実性についてであるが、当時の画法に徴し、また建築の細部が当時の記録と符合することからも、極めて写実性の高いものであるとされる³⁾。ただし、建築物の大きさに比べ敷地が著しく縮小されており⁴⁾、従って庭園部分も甚だしく狭い姿で描かれているとせねばならない。

將軍邸：町田家旧蔵本についてみると、將軍邸（図-11）はその主要建築物に関する限り、寝殿造りの色合い

図-11 將軍邸（柳の御所）の庭園
（洛中洛外図の世界より、町田家旧蔵本）

がかなり強いといわれる⁵⁾。主殿の南にひろがる主庭を限るようにして土塀が設けられており、それはやがて矩折れして北に延びる。その中ほどには唐破風をつけた中門が設けられている。主庭をなす南庭には大きな池が穿たれ、主殿前面で殊更に汀線が池側にせり出すようにして屈曲し、池と御殿の間にはかなりな平坦部分がつくり出されている。ここには寝殿造りにおける“ひろにわ”の雰囲気を感じられる。庭は東の築地まで一杯につくられていて、土塀に寄せるようにして護岸石組がなされ、池が土塀のそばまで延びている。南の護岸は特にその東端部で大形の石が用いられていて、この池のひとつの見せ場をつくり出しているかに見える。

上杉家蔵本（図-12）では、町田家旧蔵本の將軍邸「柳の御所」とは違い、義晴の「室町殿」とされる⁶⁾建築群の屋根越しに唐門と四脚門が見える。唐破風をもつ中門と、これから延びる土塀がわずかに見え、これに囲まれた主殿西側の平庭には見事な松が、中門を引きたてるようにして両翼に配植されている様子が見える。南庭には池が大きく穿たれ、その南岸中央やや東寄りから主殿の南西に向うようにして岬が延び、そこには池にさしかけるようにして見事な松が配植され、白梅が添えられている。主殿正面の“ひろにわ”は柳の御所のそれに比べ、かなり狭い点が注目される。北岸の汀線は主殿正面では、むしろ主殿側に食い込むかたちを取り、西寄りの一角が南側の岬に向かうかたちで池中に延びる。“ひろにわ”には汀線に近く見事な景石が配され、紅梅がこれに配植され、一庭においてとらえられた紅白梅の心憎いほどの対応がみられる。主殿の西南に連なる入母屋根屋根の建物を大きく迂回するようにして池が穿たれ、庭の南西は高い築山となり、深い植込みとなっていて、この南庭をよく締めくくっている。池の東北部には晴と蔭の空間を隔てるようにして鰯板塀が建つ。この塀は大館常興日記にみえるように、將軍の座敷から見える庭において鰯板や塀（土塀か）で垣をするのは先例がないにも拘らず設けたものとされる⁷⁾。このような新しい手法を採り入れる姿勢が、ひいては書院造りを生み出し、書院庭園を成立させる原

図-12 將軍邸（室町殿）の庭園
（標注 洛中洛外屏風 上杉本より）

図-13 細川管領邸庭園（左）と典厩邸庭園（右）
（洛中洛外図の世界より、町田家旧蔵本）

図-14 細川管領邸庭園（左）と典厩邸庭園（右）
（標注 洛中洛外屏風 上杉本より）

動力のひとつとなっているものとみたい。

築地を超えてその外側にもう一つの築地がみられ、この間には数本の見事な松の太木が植えられていて、この松が南庭に景を添えている点が注目される。

細川管領邸：町田家旧蔵本（図-13）についてみると、南庭には池が穿たれ、主殿の南には“ひろにわ”が広くとられている。主殿の東南には入母屋の建物が建ち、その前面やや西寄りには唐破風の見事な亭橋⁸⁾が架け渡されている。このようないわゆる屋形橋は東山殿庭園につくられた竜背橋あるいは義政の烏丸殿にあった湖橋に遡り得るものであって、それは寝殿造り庭園にみられた橋とはその系列を異にするものとみられる。池の東北岸から出る大きな岬と“ひろにわ”とは亭橋で結ばれる。池水は東から導入され、亭橋下を経て、直ちに南に流れ出るかたちであった。亭橋の南には池を狭んで見事な巨石による護岸石組がなされており、その1部が画面に表されている。

南庭を限る土塀の中ほどには中門が開かれている。そ

れは寝殿南階から中門へ至る動線を、この邸ではまだ残していることを示唆するものとみてよいであろう。

上杉家蔵本（図-14）の細川殿は晴元時代の邸とされる⁹⁾。その主庭は高国時代のそれを継承したものであるが、細部について見ると、かなりの変化が認められる。

まず池についてみると、特に北岸では汀線が入り組んでおり、主殿前面の“ひろにわ”部分で水面が北側に大きく拡がり、その汀線には要所に見事な石が配置され、配植がなされている。高国時代、“ひろにわ”と亭橋は直結していたが、ここでは、“ひろにわ”から石橋を渡ってのち、亭橋に到るかたちをとる。また、亭橋の東側も岬によって北岸に達するのではなく、石橋を介して北岸に達する構成をもっているものとみられる。即ち、高国時代の岬が中島に変わったと見られる。この中島には巨石の見事な護岸石組がなされ、松の古木が配植されて、亭橋を一層引き立てている。

庭の西南隅には、新たに高い築山が築かれ、その裾には見事な石組がなされている。

ここで特に注目したい点は、高国時代に見られた主殿から“ひろにわ”さらに中門から表門に通じる一連の空間が、ここでは失われている点であり、伝統にこだわらない新しい空間構成といえよう。それは庭園について見るとき、寝殿造り庭園の地割りから書院庭園の地割りへの展開に深くかかわるものと考ええる。

典厩邸：町田家旧蔵本（図-13）を見ると、主庭は主殿の南前面にひろくとられている。主殿正面、南の築地塀に寄った位置には数を抑えながら、しかし選り抜きの石を使った見事な石組、これに配するに松と梅の古木を以てした、まことに趣き深い平庭をつくり出している。主庭の北を限る塀には中門が開かれる。主庭の東南に寄せて配植される一群の植栽は、この中門が開かれたとき、見付けの植栽として、おそらく見事に機能したであろう。このように見るとき、この南庭は緊張度の高い庭園を構成しているといえよう。この庭園には主殿前面の“ひろにわ”としての空間がなお確保されている姿が認められる。

上杉家蔵本（図-14）における典厩邸は晴賢の屋敷であり、これと町田家旧蔵本にみる尹賢時代のそれを比較するとき、主庭の構成は大きく異っていて、大規模な改造が行われたことを示している。主殿前面の主庭についてみると、かつて、東築地まで延びていた平庭は中門廊の西南隅の位置に塀が建ち、そのため著しく狭められ、さながら内庭の観を呈している。この塀には、もはや中門は見られず、内庭はこの塀によって画然と仕切られている。しかも、内庭には数多くの巨石が主殿の間近かまで配置され、この岩組の根を洗うようにして池が穿たれ、梅・松の古木を主とする深い植込みが、この内庭に深みを作り出している。内庭の東を限るこの塀と四脚門の南に設けられた築地塀によってつくり出された中門廊前面の空間は、尹賢時代において“ひろにわ”が果たした機能を分け持つ空間とみてよいかも知れない。図-14では中門廊の正面に三ツ足をもつ丸い鳥籠が一对据えられていて、驚合せが行われている模様が窺われる。

この典厩邸の内庭に見る状況には、園城寺光浄院客殿

における建物と庭園のかかわり合いを想起させるものがあり、この庭園を初期書院庭園の確かな一例としてよいであろう。

おわりに

上杉家蔵本洛中洛外屏風の典厩邸において、初期書院庭園の確かな事例をみた。そして、それは象徴性豊かな庭園とされる。本論文では付書院をとりあげた。それは付書院が書院の祖型とされる故であり、そして付書院が次第に襲の場から晴の場に展開する姿をみた。それは付書院が本来襲に属しながらも同時に晴の性格を有するものであることに由来するとした。而して、付書院前庭が書院庭園に収斂されるなかで、この前庭がもつ座観性と、それゆえに成立を可能にするとみられる象徴性は、書院庭園の性格づけの重要な要因のひとつとなるものとした。また、典厩邸のあの初期書院庭園において見る塀の仕切りの意味を考える重要な手掛りとして、ここでは立部をとりあげた。

引用および参考文献

- 1) 太田博太郎：床の間、104～107、岩波書店、東京、1978
- 2) 堀口捨己：書院造りと数寄屋造りの研究、493、鹿島出版会、東京、1978
- 3) 同上、461～462、483
- 4) 同上、462
- 5) 平井 聖：日本住宅の歴史、111～112、日本放送出版協会、東京、1974
- 6) 堀口捨己、前出、485～486
- 7) 同上、482
- 8) 森 蘊：日本の庭園、116、創元社、東京、1957
- 9) 堀口捨己、前出、482

※なお、図-1～図-10に用いた絵巻物の原図は、小松茂美編；日本絵巻大成および続日本絵巻大成、中央公論社刊によった。

Summary : Shoin style is an important and fundamental style of Japanese house, and a shoin garden would have been developed corresponding with the development of the shoin style. We considered the changing process of several elements relating with the development of shoin garden using historical materials like a picture scroll of Honenshonin-eden and a folding screen of Rakutshu-rakugai-byobu.